

大阪探検隊

Osaka City Expeditionary party

「トンボりに奴が来た」

-魚類生態系調査-

完璧に晴れ上がった8月11日のトンボリ。

炙るような陽射しで半ば気絶しつつ歩いていると、下大和橋に、普段見かけない人だかりがあった。マスコミの取材と憶しきカメラの一群と取材陣。そして、不安そうに川面を見つめる黄腕章の市職員たち。

そのなかに、真剣な面もちで記者に答える都市環境局Y係長の姿を見つけた。

「ど、どないしたんでっか!？」

「魚、とってます」

「!？」

都市環境局では季節ごとに市内河川の魚類生態系調査を実施しているそうで、いままさにその調査の真っ最中。



環境への関心が高まるなか、テレビ大阪はじめマスコミ3社が詰めかけての”イベント”となった次第である。さて、「釣果」やいかに。

まずコウライモロコ。それも体長1cmほどの幼魚である。コウライモロコというのは、市内河川の美しさをはかる指標種=バロメーターになっていて、しかもその幼魚が見つかったということは東横堀川や道頓堀川で定着している可能性があるということ。



写真)コウライモロコ
大阪市建設局 HP より

臭い、汚いトンボリは、もはや昔の話である。潮の干満と水門操作を巧みに組み合わせた大川清浄水の導入や濾過装置のマイクロストレーナー、日々の水面清掃など、様々な水質浄化の試みが、このわずかな体長1cmのいのちに結実しているとはいえないだろうか。

つぎに姿を見せてくれたのはマハゼだった。マハゼは海の魚である。それが道頓堀川で見られるのは、この川が海に近接する汽水域にあるから。

実際、道頓堀川の西の端はほとんど海水といってもよい。今日は朝から潮が上がってきていたこともあり、かなり内陸に入ったここ下大和橋でマハゼが穫れたのだろう、とYさん。ちなみに、ハゼの類も比較的きれいな水を好む。

最後にあがった”奴”は、ちょっとコワモテであった。ブラックバスである。

魚体も大きく、20cm程度のものが2尾あがった。琵琶湖で問題になっているブラックバスが下りてきたものかどうかは不明だが、これからの市内河川の生態系を考えていく上で課題として取り組むべき魚種ではある。



しかし、きれいになったもんだ、トンボリ。

汗をかきかき、ふと川面から顔を上げると、心地よい川風が頬をなでていった。

とんぼりリバーウォーク